

太宰治「遊興戒」論

—— 転位する依存 ——

* 舘 下 徹 志

Tetsushi TATESHITA

A study of Dazai Osamu's "Yukyokai"

Dependence to be replaced

はじめに

太宰治の短編小説「遊興戒」は『新釈諸国噺』（昭和20・1、生活社）の中にあつて、井原西鶴による原典との出来映えの差に触れられることが多い作品である。

原作が写実的で、又完成度の高いものは、さすがに太宰の書き直しの手腕によつても、原作に及ばないという感が強い。たとえば、「遊興戒」の原話「置土産」の「人には棒振虫同前に思はれ」は、西鶴の全作中でも傑出したものであるが、原作のもつ自然のあわれが、「新釈」で失われている。

吉田精一によるこのような厳しい評価は、その後の太宰研究においても概ね引き継がれることになる。設定や筋立てをそのまま借りた結果、「それにまつはる私の空想を自由に書き綴」った箇所が浮き立って見えることは否めない。

北条団水が編んだ井原西鶴の第一遺稿集『西鶴置土産』（元禄6・一六九三年刊）所収の「人には棒振虫同前に思はれ」（巻二・二）は、田山花袋、正宗白鳥の激賞をはじめ、そこに表現された「陋巷に生きる庶民の哀切な詩情」（檀谷昭彦）や「悲痛な人生諦観者」（白井吉見）の境地が、西鶴最晩年の到達点を示すものとして高く評価されてきた。

上野の桜が時季外れの狂い咲きを見せる頃、金魚屋での豪気な商売に驚いていた男たちは、「小桶」に集めたぼうふら（棒振虫）を「錢二十五文」で売りにきた田舎者風情の男に目をとめる。よく見ると、「悪所の友」で、行方知れずとなつていた「伊勢町の月夜の利左衛門」に間違いない。その「見にくい姿」に同情した男たちは「貧樂に世を渡らすべし」と金銭的支援を申し出る。

ところが、利左は現在の窮状について「さのみ恥しき事にもあらず」と述べて、「御合力」をきつぱりと断り、その日の稼ぎで「一盃の茶碗酒」を振る舞う。利左の侘住居には、「父様の錢持つて戻らつしや」るのを待つ四歳になる「男子」と利左に請け出されて「内儀」となったかつての遊女「吉州」がいた。吉州は男たちのうち、「伊豆屋吉郎兵衛」の訪問を涙ながらに拒む。「只一度仮なる枕物語せし事」が「心に掛」かるからだった。利左は吉州の真心（「誠なる」）「やさしきことわり」に「胸を晴し」、客人たちを迎え入れる。壁に吊り下げた仏壇（「釣仏棚」）の扉を打ち割り茶を入れる気概を見せたものの、着替えがないため蒲団にくるまつている「御秘蔵の男子」の不憫さに利左と吉州は「前後を覚えず涙に成」るのだった。帰り際、男たちは持ち合わせの「一步三十八、こまがね七十目ばかり」を天目茶碗に入れて立ち去るが、利左は「神ぞく筋なき金を貰ふべき子細なし」と怒り、投げ返す。後日、三人は吉州に金が渡るよう手配する。しかし、利左一家はすでに江戸を離れ、行方もわからなくなつていた。「女郎狂ひもまよひの種」と悟り、「三人共に」放蕩をやめたので、馴染みの女郎たちは大損をしたという。

表題のとおり、世間からは「棒振虫」のように侮られるとしても、「昔の大尽として男としての面目と誇り、乃至遊女として女としての意気と張り」とを生通さうと（片岡良一）する姿に、自己の尊厳を手放さず、世の中の道理を受け容れる者の潔さが表出されている。一方で、その劇的な効果に着目すれば、広嶋進が論じるように「外聞や面子にこだわる大尽や遊女の『虚栄』の喜劇」とも映るだろう。ある理想の具現化を図るのではなく、「誇り」にも「虚栄」

にも囚われる人間の避けがたい現実を描く「人には棒振虫同前に思はれ」は、そのような読みの幅を包蔵する優れた作品である。

本論は、太宰治が「遊興戒」において「人には棒振虫同前に思はれ」をどのように書き換えようとしたのかという課題を中心に据え、その翻案がもたらした効果の質を見極めることに目標を置く。「遊興戒」ははたして、「原作のもつ自然のあわれ」を台無しにした凡作なのだろうか。¹¹

一

「遊興戒」は、原典にはない、次のような「三粹人」の描写から始まる。

むかし上方の三粹人、吉郎兵衛、六右衛門、甚太夫とて、どしは若し、家に金あり、親はあまし、男振りもまんざらでなし、しかも、話にならぬ阿呆といふわけでもなし、三人さそひ合つて遊び歩き、そのうちに、上方の遊びもどうも手ぬるく思はれて来て、生き馬の目を抜くとかいふ東国の荒つばい遊びを風聞してあこがれ、或るとし秋風に吹かれて江戸へ旅立ち、途中、大笑ひの急がぬ旅をつづけて、それにしても世の中に美人は無い、色が白ければ鼻が低く、眉があざやかだと思へば顎が短い、いつそかうなれば女に好かれるよりは、きはられたい、何とかして思ひ切りむごく振られてみたいものさ、などと天を恐れぬ雑言を吐き散らして江戸へ着き、あちらこちらと遊び廻つてみても、別段、馬の目を抜く殺伐なけしきは見当らず、やはりこの江戸の土地も金次第、どこへ行つても下にも置かずもてなされ、甚だ拍子抜けがして、江戸にもこはいもの無し、どこかに凄い魔性のものはあるのか、と懐手して三人、つまらなさうな様子で、

上方から江戸への遊山の目的とは、「凄い魔性のもの」と出会い、未経験の「荒つばい遊び」に耽ることだった。それは、「どうも手ぬる」と感じられる退屈な日常から抜け出すための冒険にほかならなかった。¹² たしかに、波線部の諸条件が整うかぎり何事であれ優遇される彼らは、たいいていの欲望を満たすことができるだろう。とりわけ「金次第」で事態が思いのままに変化する様子を「三粹人」は飽きるほど見続けてきたはずだ。咎める者がいないのをよいことにして遊び呆け、その果てにわがままが通り過ぎることもつまらなさを感じ

じはじめてしまう。したがって、「大笑ひの急がぬ旅」の終着地、江戸に吉郎兵衛たちが期待したのは、常識の外にある、金も効力を発揮しない異界、すなわち「魔性」が支配する世界との遭遇だった。

切れ目のない順境に嫌気が差すという屈折した不遇感は、実線を付した箇所のでざけた欲望へと姿を変え、常態と化した「女に好かれる」ことよりも、突然の裏切りに打ちひしがれるつらい展開のほうに刺激を求めているのである。ただし、「三粹人」が思い描く「きははれ」、「思ひ切りむごく振られ」る男の悲劇もまた、「八幡祭小望月賑」(万延元・一八六〇年七月、江戸市村座初演)の山場、美代吉による〈愛想づかし〉の場面のような、歌舞伎をはじめとする演劇や文芸に取り入れられた趣向をなぞっているのだろう。芝居であれば多くの場合、血なまぐさい結末の発端となる〈愛想づかし〉を夢想する彼らは、既成の物語の枠組みを借りて、猟奇的な成り行きに巻き込まれる自己を想像し面白がっているにすぎない。「遊興戒」の「三粹人」は、色里における悲喜こもごもを、すでに語り終えられた話の変形と見なしている。その傲慢な観念性こそ浮かれの根拠であった。

こうして、三人の浮かれ者にとつては物足りない旅が終わろうとしていたとき、「月夜の利左といふ浮名を流し、それこそ男振りはよし、金はあり、この三粹人と共に遊んで四天王と呼ばれ、数年前に吉州といふ評判の名妓を請出し、ふつと姿をかくした利左衛門」との思いがけない再会が待っていた。「浮名」の由来は「月夜鳥」であろうか。月の美しい夜、浮かれて鳴き騒ぐ鳥にたとえて遊び人のことを指すあだ名である。あるいは、暗い色調の着物を粹に着こなす男だったのかもしれない。かつてはその名に浮かれ者の徴を負った利左衛門の登場の後、「遊興戒」は「人には棒振虫同前に思はれ」の筋立てに沿って進む。太宰による加筆は主に、「四天王」が見せる抑制を欠いた発言において目立っている。「三粹人」が利左に経済的支援を申し出る場面で、原典が「此後是我々うけとり、貧樂に世を渡すべし」と控えめな言い回しで利左の負い目にも気遣いを見せるのに対して、「遊興戒」は饒舌に友達甲斐を押しつける。

ここで逢うたが百年目さ。どうだい、これから、わたたちと一緒に上方へ帰つて、また昔のやうに四人で派手に遊ばうぢやないか。お金の事や何かは心配するな。口はばつたいが、わたしたち三人が附いてゐる。お前の一生は引受

けた。

金に困っている友人を金の力で救おうという友情の誇示は、何ごとであれ、わかりきったこととして片付けるものわかりのよさに裏付けられていた。金離れのよさも含めて、諸事に屈託なく振るうことが許されてきた「三粹人」は、友の窮状には相身互い、情に厚いところを發揮して、躊躇なく身銭を切るのが捌けた粹人のならい、と直感的に反応しているのである。だが、そうした友達甲斐の早のみこみが、他ならぬ友を苦しめることもあるだろう。

上方で「四天王」が皆、潤沢な資金にものを言わせ、金に糸目をつけない遊び方をしていたころは、仮に相互に貸し借りがあつたとしても自ずとその返報が期待できた。そのため、彼らには貸借という一時的な贈与行為の重みはさほど感じられなかつたはずである。しかし、四人の内、利左ひとりが零落した今、この構造はもはや崩壊している。極貧にあえぐ利左に提示された富裕な三人による「御合力」とは、憐憫を形にした利他行動にほかならず、その行為は、マルセル・モースが見逃さなかつたギフト(gift)の両義性、すなわち「贈与という意味と、毒という意味」を帯びることになる。利左は陰に軽侮を潜ませた「三粹人」の同情を拒絶する。もちろん、「三粹人」はそうした潜在的な悪意を自覚してはいない。かつての気の置けない付き合いに起因する善意、「悪所の友の好誼」を示したまでのことだろう。だが、他者のためによかれと思つてすることの副作用を予測しようとしないと、これまで金の力によって庇護されてきた「三粹人」の、「話にならぬ阿呆といふわけでもな」いが深慮には欠ける半端な分別の様態が露呈しているのである。

二

三人の申し入れを利左が断る場面においても、原典と「遊興戒」との懸隔は大きい。

まだ此身になりても、過ぎにし贅やまずして、女郎買の行末かくなれる習なれば、さのみ恥しき事にもあらず、いかなくおのくの御合力は受けまじ、利左ほどの者なれども、其時にしたがひて、悪所の友の好誼に、けふを送るといはれんも口惜し、面々のこゝろざしは千盃なり、久しぶりに逢ふ事、

又重ねて出合ふ事も有るまじ、一盃の茶碗酒、しばしの楽みなるべしと先立つて出、

「人には棒振虫同前に思はれ」の利左はまず、「此身」となるに至つた原因を自己分析し、「悪所の友」による経済的支援の申し出を断る。その情理を兼ねた固辞の言葉は、端から見れば落魄と映るであろう現状を「さのみ恥しき事にもあらず」と捉える認識に支えられていた。必然としての貧苦の受容と新たに芽生えた家計を支える者の自負が迷いのない態度となつて、利左の意気地を表象するのである。

さらに利左は、旧友との再会を祝い、「此後は我々うけとり、貧樂に世を渡らすべし」とまで氣遣つてくれた三人の「こゝろざし」への感謝を込めて、ささやかな酒宴を催す。その誘いのうち、傍線部は「盃」の縁語と考えられよう。この上ない（千盃なり）ご厚情に「一盃の茶碗酒」とは不釣り合いながら、氣持ちだけは盃を「さし」交わし、「重ね」たつもりでお付き合い願いたい、というのが利左の真心であつた。「久しぶり」の「ぶり」にも、酒席でのふるまいを意味する「酒ぶり」が言いかけられているのかもしれない。こうして、それまでの話題の險しさは遊びごころにくるまれて、「粹」のゆとりへと置き換わる。

このような氣遣いに溢れた「人には棒振虫同前に思はれ」の理知的な語りとは対照的に、「遊興戒」の利左はひたすら、柄の悪さで三人を寄せ付けまいとする。

利左は、顔を青くしてふんと笑ひ、そつぽを向きながら、

「何を言つてゐやがる。人の世話など出来る面かよ。わざわざこの利左をなぶりに上方からやつて来たのか。御苦労な事だ。こつちは、これが好きでやつてゐるのさ。かまはないでくれ。遊びの果は皆こんなものだ。ふん。いまにお前たちだつて、どんな事になるかわかつたものぢやない。一生引受けたは笑はせがる。でもまあ昔の馴染甲斐に江戸の茶碗酒でも一ぱい振舞つてやらうか。利左は落ぶれてもお前たちのごちさうにはならんよ。酒を飲みたかつたら附いて来い。あはは。」と空虚な笑ひ方をして、小桶を手にはさげてすたすた歩く。

利左は「遊びの果」を一足先に経験した先達の立場から、奈落に沈む者の呪詛にも似た粗野な言葉遣いで無根拠な被害者意識をのぞかせる荒んだ気分を見せつける。それは、「もはや粹からはほど遠く野暮にさえなっている」「演技になっていない演技」(斎藤理生)であり、「落魄の物語」を「過剰に演じる」とことで「前面に押し出した型の裏に自らを隠」(木村小夜)すことでもあった。倒立した優越の演技が誰の目にも虚勢と映ることは、「空虚な笑ひ方」を揶揄する語り手が代弁している。空威張りのおかしさは、「小桶」に視線を送る語り手の底意地の悪さとともに立ち現れる。

利左が撒き散らすことうした陰湿な笑ひは、家族について語る科白にも見られる。再び原典との違いを確かめてみよう。

今の内儀は定めて吉州かとい中をいへば、此女郎ゆゑにこそ、かくはなりぬ、傾城も実のある時あらはれて、四年あとより男子をまふけ、父様かゝ様といふをたよりに、けふまでは暮しけると、夢の如く語るを、うつゝのやうに聞きて、

馴染みの遊女だった吉州を請け出し、利左は所帯を持った。生活は苦しい。しかし、俗諺にいう「傾城に誠なし」どころか、吉州は「実のある」女房で、四年前に授かった男の子が「父様かゝ様」と呼ぶのを生きがいに暮らしている。「此女郎ゆゑにこそ、かくはなりぬ」には過去の行状への自嘲が見られるとはいえ、利左は現在の家庭生活に満足しているのだった。「人には棒振虫同前に思はれ」の語り手は「うつゝ」を「夢」と同義の語として用い、利左たちの日常と遊里との隔絶を印象づける。この一節に顕著な、語り手と利左とが協働的に形作る簡明で詩的な言葉の世界とは異なり、「遊興戒」の利左の物言いはどこまでも騒々しくささくれ立ち、語り手もその荒い語気の陰に「卑屈」さを読み取る。

「時に利左、いまでも、やはり吉州と？」

「いまでも、とは何だ。」と利左は言葉を荒くして聞きとがめ、「粹人らしくもねえ。口のききかたに気をつける。」と言つて、すぐまた卑屈にやりと

笑ひ、「その女ゆゑに、御覽のとほりのぼうふら売りさ。悪い事は言はねえ。お前たちもいい加減に茶屋遊びを切り上げたほうがいいぜ。上方一と言はれた女も、手活の花として眺めると、三日経てば萎れる。いまちや、長屋の、かかになつて、ひとつき風呂へ行かなくても平気である。」

「子供もあるのか。」

「あたりめえよ。間の抜けた事を聞くな。親にも似ねえ猿みたいな顔をした四つの男の子が、根つからの貧乏人の子らしく落ちついて長屋で遊んでゐる。見せてやらうか。少しはお前たちのいましめになるかも知れねえ。」

利左にとつてこの問答は、教えを授ける／授かるという非対称的な関係を堅持することに意義があった。相手の問いに難癖をつけてから答え始めるのはそのためである。四人の中で利左だけがこだわりを持つ権力闘争の戦略とは、過剰な卑下で他者の応答を封じることだった。傍線部の身も蓋もないルッキズムは、返す言葉を失わせるための露悪的な暴言にすぎない。貧しさに慣れた様子の妻や子を捉える突き放した視線はそのまま、二十五文の日銭のために働く自分にも向けられるはずだ。太宰は、利左に冷笑的な家族紹介をさせることで、「人には棒振虫同前に思はれ」に流露する夫婦、親子の情や平安を覆い隠したのである。

三

臼井吉見は、太宰治が世を去つて間もなく「遊興戒」を例に挙げ、西鶴作品を「あくまでもコメディとしてとりあげてゐる」¹⁸その創作姿勢にこの作家の特徴を指摘した。また、その発展として、「太宰はおそらく西鶴において人間の滑稽を見抜いてゐた笑ひの作家を見出してゐたのではなからうか」という魅力的な仮説を提示している。前章までの考察から「コメディ」や「滑稽」の要素を探るとすれば、「人には棒振虫同前に思はれ」の利左が見せるゆとりある諦めの境地を、昔の仲間に侮られることを恐れ、訳知り顔で零落の先達を演じてみせる苦衷へと変形させたところに求められるだろう。

「遊興戒」の利左は「三粹人」との再会后、一度も欣然と笑うことがない。「顔を青くしてふんと笑ひ」、「空虚な笑ひ方をして」、「口をゆがめて苦笑ひし」、「卑屈にやりと笑ひ」、「薄気味悪い微笑を頬に浮べ」る。その笑ひの基調をなす

のは自嘲だが、利左は不満や不安が底を流れる居心地の悪さに気づかれぬよう腐心しているのである。「三粹人」はすでに、「金魚屋の番頭にやたらにお辞儀をしてお追従笑ひなどしてゐ」たり、「小桶に一ぱいのぼうふらを、たつた二十五文で買つてもらつて、それでも嬉しさうに、金魚屋の下男にまで、それではまた、と卑しい愛嬌を振り撒」いたりする利左の姿を目撃していた。原典にある「下男どもに軽薄云ひて」が、商売上の都合からお世辞を言う習慣が身についた利左の内発的な生き方を捉えているのに対して、「お追従笑ひ」や「卑しい愛嬌」は傍目にもつらい演技であることを表している。「遊興戒」の「三粹人」は、利左によるぎこちない芝居の続きを見せられているのだ。

では、「人には棒振虫同前に思はれ」と「遊興戒」とでは、利左のどのような違いが人物形象の差異をもたらしているのだろうか。詳しくは語られていないが、浮かれ者の「月夜の利左衛門」は遊里で放蕩三昧の日々を送っていた。それを可能にしていた最も重要な条件とは、「家に金あり」という裕福さだった。つまり、利左は〈金〉に依存することで、粹人としての習俗に浸ることができた。〈粹人〉という社会的な承認にも利左は依存していられた。〈金〉を物質的依存とすれば、〈粹人〉は理念的依存といえよう。

自分自身の存在に固執することは、基本的に自分自身のものではない他者の世界に服従すること（後の時点では生起しないが、存在したいという欲望を作り上げ、可能にするような服従）を必要とする。他性に固執することによってのみ、人は自分「自身」の存在に固執するのである。人は決して自分が作ったのではない諸関係に対して可傷的であり、社会における原初的で創始的な疎外を徴しづけるカテゴリー、名前、関係、分類を通じて、常に、ある程度「自分自身の存在に」固執する¹⁹。

ジュディス・バトラが述べているのは、承認をもたらす可能性がある何かへの服従の後にしか自己の生存はあり得ないということだろう。「自分自身の存在に固執すること」とは、スピノザが『エチカ』でそれぞれの「現実的本質」であるとした「コナトウス」のことである。それは必ず「他性に固執すること」の後に可能となるため、「可傷的」で搾取されやすい欲望でもある。「基本的に自分自身のものではない他者の世界に服従すること」を外在する何かに物質的

または理念的に依存することと置き換え、両作品を分かち特質について考えてみたい。

まず、「人には棒振虫同前に思はれ」の利左は、〈金〉や〈粹人〉への依存によって「自分自身の存在に固執すること」ができていた。遊興への没頭という人間の欲望に働きかける仕掛けに対する服従によって〈粹人〉という主体は成り立っていた。しかし、「月夜の利左衛門」としての存在に見切りをつけなければならぬときが訪れる。勘当や破産などの理由で〈金〉への依存ができなくなり、〈粹人〉という「他性」に依存することもかなわなくなった利左は、それまでの主体性を手放し、妻子とともに生きることには依存しはじめる。「父様かゝ様といふをたよりに、けふまでは暮しける」という吐露に曲解の余地はなく、新たな依存（「たより」）への転位が行われたことをかつての「悪所の友」に告げているのである。

したがって、金魚屋での「軽薄」もやはり、感情労働の一面を持つ「棒振虫」の売り買いという「他者の世界」に服従する、利左の板に付いた商売人気質の表れと見なすことができよう。田山花袋が「世の中の辛酸をなめつくした人でなければ、ちよつと書くことができないやうなもの」と評した「人には棒振虫同前に思はれ」に描かれる諦観とは、他者に依存することではじめて生きていられるという事実を直視し受け容れて、そのときの条件に合った依存を見極めることではなからうか。「自分自身の存在」に関わっていた依存を断ち切ることは難しい。そのような新たな依存への転位を鈍らせるもの（ことを）〈執着〉と呼ぶのだろう。

太宰治の「遊興戒」は、その〈執着〉に執着する翻案小説である。「金魚屋の番頭にやたらにお辞儀をしてお追従笑ひなどしてゐる」利左は、「三粹人」と一体化した語り手の目に、拙いおべっか使いとして痛々しく映っている。「下男にまで、それではまた、と賤しい愛嬌を振り撒きいそいと立ち去る」姿も、世馴れぬ利左の屈託を冷やかに浮かび上がらせる。こうした不自然な言動の背景にあるのは、遊里で下にも置かない歓待を受けた過去への〈執着〉のではないか。取り巻きからおだての言葉を浴びてきた「粹人」利左は今、反転した立場に居心地の悪さを感じている。斎藤理生が論じるように、「三粹人に再会し、その〈空気〉に巻き込まれると、利左のなかに粹人としての自分が戻ってきてしまった²²」ことは確かであるが、その前にも「粹人」への〈執着〉は残

り火のように残っていたものと考えられる。

すゑ葉も枯れて生垣に汚くへばりついてゐる朝顔の実一つ一つ取り集めてゐる婆の、この種を植ゑてまた来年のたのしみ、と来年どころか明日知れぬ八十あまりらしい見るかげも無き老軀を忘れて呟いてゐる慾の深さに、三人は思はず顔を見合せて呆れ、利左ひとりは何ともない顔をして小腰をかかめ、婆さま、その朝顔の実を一つ二つわしの家へもわけて下さいまし、何だか曇つてまゐりましていけません、など近所のよしみ、有合せのつらいお世辞を言ひ、陰干しの煙草をゆへた細繩の下をぐづつて突き当りのあばらやの、窓から四歳の男の子が、やあれ、ととさまが、ぜぜ持つてもどらしやつた、と叫ぶもふびん、三人の足は一樣に立ちすくんだ。利左は平気を装ひ、「ここだ、この家だ。三人はひつたら、坐るところが無いぞ。」と笑ひ、

谷中の陋巷に分け入る場面でも利左はご近所の老婆に「有合せのつらいお世辞を言」う。語り手はほしくもない朝顔の種をねだる不誠実さが気に食わないようだ。「何ともない顔をして」「平気を装」う利左の言動と底意とのずれを咎め立てる。だが、ここに描かれているのはそのような嘘の醜怪さばかりではない。「この種を植ゑてまた来年のたのしみ」という老婆のつぶやきは、「自分自身の存在に固執すること」を支える朝顔という「他性」への依存を鮮やかに照らし出す。「来年どころか明日知れぬ八十あまりらしい見るかげも無き老軀を忘れて呟いてゐる慾の深さ」をそこに見るのは、実のところ余計なお世話なのであつて、「存在したいという欲望を作り上げ」る朝顔への飾らない執着すなわち「服従」はむしろ、依存の転位に苦しむ利左や依存の限界に気づかぬ「三粹人」を差異化するだろう。それは、「四歳の男の子」の叫びに割り込んだ、「ぜぜ持つて」という率直な期待の表明とも通底する依存の承認であり、肯定にはかならない。

この小説の語り手がこだわる利左の演技のみじめさは、家産に寄りかかることで成りおこせた粹人から自分で稼ぎ家庭生活を営む者へという必然的な依存の転位が中途半端なままであることに起因している。もはや粹人としての主体を取り戻すことはできないが、かといって専心家計を執る人にもなりきれない宙づりのまま、利左は不慣れた感情労働や社交辞令を強いられ、いらだちを募

らせる。しかし、そうした依存の不安定性こそ、「人には棒振虫同前に思はれ」に見られる「人間の実存の誇り」(白倉一由)とは異なる、「遊興戒」の滑稽さを生み出す要因でもある。利左の依存をめぐる悪あがきは、すぐれて人間的な喜劇の作法になつていたのである。

四

「遊興戒」の語り手は、原典に沿つて利左一家の儉しい暮らしぶりを追いかける。観阿弥作の謡曲「鉢木」²⁴を想起させる、「仏壇の戸びら」を薪として茶を淹れる大仰な歓待から、「四歳の男の子」の哀れな様子へと視線は移る。

先刻窓から顔を出してゐた子供はと見れば、いつの間にか部屋の間一枚蒲団にこぶ巻になつて寝てゐる。どうやらまづばだかの様子で、唇を紫にしてがたがた寒さにふるへてゐる。

「坊やは、寒さうだな。」と客のひとりが、つい口をすべらしたら、内儀は坐つたまま子供のはうを振り返つて見て、「着物を着るのがいやなんですつて。妙な癖で、着物を着せてもすぐ脱いで、ああしてはだか寝るんです。疳の虫のせゐでせうよ。」とさり気なく言つたが、坊やは泣き声を出して、「うそだ、うそだ。坊は、さつき溝へ落ちて、着るものが無くなつたから、かうして寝かさされて、着物のかわくの待つてゐるのだ。」といふ。内儀も気丈な女ながら、ここに到つてこらへかね、人前もはばかりらず、泣き伏す。亭主は七輪の煙にむせんだ振りをして眼をこする。

貧苦の実態を明らかにする「坊や」の言葉は、「自分自身の存在に固執すること」の原初的な在り方を示している。客人の眼差しが遊里の記憶とともに「内儀」を苦しめる。突然の訪問を受けなければ、我が子の「妙な癖」を捏造する必要はなかった。子の受苦に堪えられない親の情をさらけ出さずにすんだ。古語の〈思ひ出なり〉という形容動詞は、後々まで思ひ出す縁となるほどの樂しみの経験をふまえて〈享樂的な〉という意味を含む。「内儀」となつた吉州にとつてその享樂が苦界で演じられた虚飾としての榮華であつたとしても、極貧の生活に開き直れないほどには〈思ひ出〉に縛られているのだといえよう。粹人という「思ひ出」に囚われる利左と同じく、吉州も依存の不安定性の中を

生きる。²⁵

零落ゆえに出来たこの愁嘆場に「人には棒振虫同前に思はれ」は次のような論評を加える。「扱は彼子が一つ著物かはりもなくてや、親の身として子を悲まざるはなかりしに、よくよく不自由なればこそ、斯る憂目を見するなれ」。着替えすら与えられない貧しさと子の愛おしさに引き裂かれる親心に、語り手は深く共感している。太宰がこの道理を説く箇所を省いたのは、原典との語り方の違いに自覚的だったからだろう。「遊興戒」の語り手は「三粹人」の何事も知り尽くしたかのような思い上がりにも、利左の心底とは異なる苦しい演技にも、冷笑的な観察眼を以て批評する姿勢を保ってきた。利左が見せる笑いの様態を細かく描き分けるのも、そうした嫌みを込めた茶化しや咎めの表れだった。芝居でいう「実事」すなわち、良識に沿って論し倫理的に振る舞う登場人物がいけないこの小説で、語り手は小言の多い（うるさ型）に徹し、できるかぎり非人情を貫こうとしている。利左夫婦の涙をうけて「扱は彼子が」と書き出す（情）をめぐる解説は、「遊興戒」の語り手には似つかわしくない。西鶴が創造した語り手に宿る（徳）の公共性から目をそらし、気ままな差し出口をたたく無責任さに安住するのである。

そうした道義から距離を置く語り手の態度は、「三粹人」の浅薄さと相同的だった。三人は利左の家を辞去する際、所持金すべてを「門口に捨てられてある小皿の上に積みかさね」た。「一步金三十八、こまがね七十目ばかり」、およそ十両の大金である。しかし、それは旧友に対する心安立ての施しにすぎなかった。三人を追ってきた利左は散々罵倒した末に、「件の小皿を地べたにたたきつけて、ふつと露地の夕闇に姿を消す」。

「いや、ひどいめに遭った。」と吉郎兵衛は冷汗をぬぐひ、「それにしても、吉州も、きたない女になりやがった。」

「色即是空か。」と甚太夫はひやかした。

「ほんたうに、」と吉郎兵衛は、少しも笑はず溜息をつき、「わしはもう、けふから遊びをやめるよ。卒堵婆小町を眼前にありありと見ました。」

「出家でもしたいところだね。」と六右衛門はひとりごとのやうに言ひ、

（中略）

「改心のついでに、その足もとに散らばつてゐるお金を拾ひ集めたらどうだ。」

と六右衛門は、八つ当りの不機嫌で、「これだつて天下の宝だ。むかし青砥左衛門尉藤綱さまが、」

「滑川を渡りし時、だらう。わかつた、わかつた。わしは土方人足といふところか。さがしますよ、拾ひますよ。」と吉郎兵衛は尻端折りして薄暗闇の地べたを這ひ一歩金やらこまがねやらを拾ひ集めて、「かうして一つ一つにして拾つてみると、お金のありがたさがわかつて来るよ。お前たちも、少し手伝つてごらん。まじめな気持ちになりますよ。」

傍線を付した箇所が如実に物語るように、よるず真面目さに欠ける「三粹人」なのであった。原典にはない、利左宅訪問後の感想を述べ合うこの場面には、先行する芸能や文芸を引用して、巻き添えを食ったかのような不快感を確かめ合う様子が描かれている。謡曲「卒堵婆小町」で「百年の姥」となった小野小町になぞらえて、吉郎兵衛は昔の思い人である吉州の容色の衰えを嘆く。それは、曲の後場で小町に憑依し狂乱する「深草の四位の少将」の執心を借りて、かつての懸想の深さをほめめかすことでもあった。六右衛門は、地謡が「悟りの道に入らうよ」と繰り返す「卒堵婆小町」の結びと甚太夫が口にした「色即是空」とをまとめ、発心につなげてみせる。

中略以降の会話も古典に依拠した事態の戯画化である。『太平記』に載る、鎌倉の「滑川」を舞台とした「青砥左衛門尉藤綱」の逸話は、儉約の美德を教えるための訓話として広く知られていた。『新釈諸国噺』の「裸川」は、この青砥伝説を下敷きとする滑稽小説だった。松明の火をたよりに、青砥は滑川に誤って落とした十文の銭を拾い集めさせる。小利大損を笑う声に青砥は「これだつて天下の宝だ」と道理を説いた。ところが、聞き飽きた話を遮り、「わかつた、わかつた」といらだちを見せる「遊興戒」の吉郎兵衛にとつて、金はもともと「一つ一つにして」扱うものですらくなく、足下に落ちてゐる十両もの金と青砥の十文の銭とは、同じ拾うにしても開きがありすぎる。このような〈型〉との近きとずれを三人は楽しんでゐるのである。それは、「卒堵婆小町」の老い、「青砥左衛門尉藤綱」の儉約という主題の重みを逆手に取り、軽みに反転させた言語的遊戯といえるだろう。

茶化しを本領とした「三粹人」の言動は、既成の物語の枠を知り尽くしているかのような驕りに依存することで成り立っていた。有り余る金はその依存を

支え続けてきた。斎藤理生が「(空気)」と呼ぶ、「互いの意見に同調していきがちな雰囲気」、「個々の意志を超えた迷惑の立ちこめる環境」²⁷とは、同質の依存が通用するかぎり共有され、増幅される自己効力感のことだろう。肥大化した集合的な自己の行方を語り手は冷徹に描く。

さすが放埒の三人も、昔の遊び友達の利左の浅間しい暮しを見ては、うんざりして遊興も何も味気ないものに思はれ、いささか分別ありげな顔になつて宿へ帰り、翌る日から殊勝らしく江戸の神社仏閣をめぐつて拝み、いよいよ明日は上方へ帰らうといふ前夜、宿の者にたのんで少からぬ金子を谷中の利左の家へ持たせてやり、亭主は受け取るまいから、内儀にこつそり、とくどいくらゐに念を押して言ひ含めてやったのだが、その使ひの者は、しばらくして気の毒さうな顔をして帰り、お言ひつけの家をたづねましたが、昨日、田舎へ立ちのいたとやら、いろいろ近所の者にたづねて廻つても、どこへ行つたのかつひに行先きを突きとめる事が出来ませんでしたといふ口上で、三人はそれを聞いて利左の行末を思ひ、いまさらながら、ぞつとして、わが身の上も省られ、ああ、もう遊びはよさう、と何だかわけのわからぬ涙を流して誓約し、いよいよ寒さのつる木枯しに吹きまкруられて、東海道を急ぎに急ぎ、おのおのわが家に帰りついてからは、人が変つたみたいにいけち臭くよろづに油断のない男になり、ために色街は一時さびれたといふ、この章、遊興もほどほどに止むべしとの戒敷。

語り手は改悛を結末とする人情噺や教養小説を快く思っていないらしい。傍線部に散見される「放埒の三人」への共感性を欠いたとげとげしい言葉遣いには、太宰が創造した語り手独特の認識が表現されている。遊興に耽る「粹人」という主体性に依存していた三人が前非を悔い改めて、生業の習慣を身につけることは確かに容易ではない。分別や信心と同様に、心身の両面にわたつてそれに適合した生き方の基礎を内面化しなければならぬからだ。語り手はそうした依存の転位に伴う困難に敏感だった。利左一家の立ち退きに触発された反省も、「遊び」を絶つという誓いの涙も、にわかな始末も信用してはいないのである。「ために色街は一時さびれたといふ」と語られる伝聞の「一時」という限定は原典には見当たらない。まずは三人に代わる新たな「粹人」の登場ま

での間と読み取るのが穏当だろうが、依存の転位に失敗した三人が、性懲りもなくまた「色街」に通いはじめたことを示唆しているとも考えられる。

金の力が絶大なものであることを「放埒の三人」はよく知っている。江戸での遊びにおいても、金になびかぬ者がいないことは実証済みだった。したがって、三人が出し合った「少からぬ金子」は、利左たちの当座の窮状を間違いない救うはずだ。昔なじみの利左とその家族の「浅間しい暮し」は見るに忍びない。その予測や意図自体は筋が通っている。しかし、当の受取人がいなければ、金の力も無効化するほかない。三人が「いまさらながら、ぞつとし」たのは、金が効力を発揮しない状況に再び直面したからである。金への依存にも限界がある。利他的な行動が意外にも暴力となるのは、こうした依存の限界を忘れて、他者の依存を先取りした気になるときであろう。とりあえず金で何とでもなるという見方のおぞましさは、あらゆる欲望の対象は金との等価交換で手に入れられるという思い込みへの依存を、他者も共有していると信じやまないところにある。それこそ依存の絶対化が招く暴力にほかならない。

おわりに

アジア・太平洋戦争の敗戦から十五年後、廣末保は戦時下の日本で太宰治の『新釈諸国噺』が世に出たことの意義についてこう書いた。

確かに読者は『新釈諸国噺』によつて空気らしいものを吸い、人間らしい我にかえつた。そして戦争下の日常的な我との間に一種の戸惑いを感じたかもしれない。それは足がそこへ現実には届かない戸惑いでもあつた。しかし何か、そのときの日本と違つた、もつと別の日本のなか——それはどこかで断たれているし、その原因は戦争といつたものだけのものでもない、その断たれたものに足を届かせてみたくなるような戸惑いであつたかもしれない。自分たちのまわりの現実よりも妙に生き生きとした世界——、そういう世界が、前近代のなかから引きだされているという感じ、しかし、それは太宰という作家によつて、太宰的にである。²⁸

近代の錯綜する矛盾やゆがみが凝縮した世界大戦の末期、「空気らしいもの」を提供することの困難と希望に、二十代半ばで敗戦を迎えた廣末保は思いをは

せる。『新釈諸国噺』の十二編の小説を創造する中で、近世の文化的伝統の陰に逃避するのではなく、西鶴の文章を起点として、人間のあまり立派とはいえない生身のおかしさに太宰は魅入られていた。ときに、おかしさを追求するあまり（どたばた喜劇）と化して、「原文の味を見失ってしまった」こともある。（うがち）や（へもどき）といった近似的な手法を再生させた「太宰的」な滑稽小説の一面といえよう。「遊興戒」もまた、読者を「妙に生き生きとした世界」へと誘う、人間のどうしようもない至らなさや据わらぬ腹を見つめるユーモア小説であった。

この小説の題名は「不殺生戒」をはじめとする「五戒」や「沙弥十戒」のような仏道の「戒」をもじったものに見える。無論、結びの一文が「この章、遊興もほどほどに止むべしとの戒勅」であることに、「原話以上に内容の教訓色を強めようとする志向」（安藤宏）を読み取るとは至当である。しかし、そのような信仰心と結びつく戒律の装いは、同時に、『戦陣訓』（昭和16・1、陸軍省）の横ずらしでもあったのではないか。「常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし」というような「べし」で結ぶ命令表現は、禁止を表す「べからず」と並んで、『戦陣訓』にも頻出する「訓戒」特有の文体であった。「遊興」における「戒」は、「戦陣」における「訓」と、同時代の道義に反するという意味でいえば、不都合な均衡関係にある。

久保田万太郎が、「昭和十九年十一月一日以降、空襲しきりなり」という詞書を添えて、「國をあげてたゝかふ冬に入りけり」と詠んだころには、翌年さらに激化する米軍による都市への大規模な空爆という、事実上の無差別殺戮の準備は整いつつあった。一方、国内では同年の暮れ、帝国議会の開院に合わせ発せられた勅語が、「今や戦局愈々危急真二億兆一心全力ヲ傾倒シテ敵ヲ撃摧スヘキノ秋ナリ」と、難局の自覚を促し、戦う意志の強化を呼びかけていた。緒戦における戦捷がもたらした熱狂で始まった（大東亜戦争）はまもなく終局を迎える。それは、戦時体制にあつては規範として働いていた美德や価値観から別の何かへという依存の転位が必要となることを意味していた。

人間は何かへの依存なしには生きられない。しかも、その依存は永続しない。そのため、依存の転位を迫られるのは必定である。だが、その転位は容易ではない。「遊興戒」には、「人には棒振虫同前に思はれ」に形象化された潔い転位に遠く及ばない人間の現実が描かれていた。粹人にも家庭人にもなりきれない

利左が抱える居心地の悪さはそのまま、依存の絶頂から断念へと向かう後退戦の戦い方に苦しむ日本の姿と重なって映る。新たな主体性を獲得するための新たな服従という依存の転位に伴う困難は、登場人物の底意を探る語り手の懷疑的な焦点化によって表象されていたのである。

注

- 1 太宰治「遊興戒」の本文は『太宰治全集』7（平成10・10 筑摩書房）による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。
- 2 吉田精一『現代文学と古典』Ⅱ現代作家と古典 九 太宰治とお伽草子（昭和36・10 至文堂、『吉田精一著作集』23 昭和56・6 桜楓社 二七三頁）
- 3 太宰治「新釈諸国噺」凡例（昭和20・1 生活社 一頁）
- 4 『西鶴置土産』の本文は、『西鶴全集』第九（正宗敦夫編纂校訂 昭和3・2 日本古典全集刊行会）による。
- 5 田山花袋「西鶴小論」（『早稲田文学』140 大正6・7）
- 6 正宗白鳥「西鶴について」（『改造』9・5 昭和2・5）
- 7 檜谷昭彦「新釈諸国噺——作品論」（『国文学解釈と教材の研究』12・14 昭和42・11）
- 8 臼井吉見「展望」（『展望』33 昭和23・9）
- 9 片岡良一『西鶴置土産』解説（昭和12・7 岩波文庫 一〇七頁）
- 10 広嶋進「町人物の展開と晩年の達成——「失敗」と「苦境」を描く作品の誕生——」（『谷脇理史・広嶋進編『新視点による西鶴への誘い』 平成23・8 清文堂出版 一七四頁）
- 11 真山青果「西鶴置土産」（『婦人公論』8・4 大正12・4）、武田麟太郎「井原西鶴」（『文藝』6・7 昭和13・7）、織田作之助「雪の夜」（『文藝』9・6 昭和16・6）はいずれも、翻案の程度に差はあるが、「人には棒振虫同前に思はれ」を原典とする作品である。「遊興戒」との比較に基づく論考に、松田忍「太宰治「貧の意地」「遊興戒」試論——真山青果「小判拾壹両」「西鶴置土産」の比較——」（『太宰治研究』16 平成20・6）、後掲斎藤理生論文（注15）がある。
- 12 小林幸夫は「太宰治「遊興戒」論——「殺伐なけしき」の発見——」（『太

宰治研究」22 平成26・6)で、「上方の三粹人」が江戸での遊興に求めた「欲望の倒錯性」を指摘し、快樂主義的な文学の系譜に連なるものとする。

13 黙阿弥作、通称「縮屋新助」の四幕目で、深川の芸者「美代吉」は一度は女房になると約束した命の恩人でもある越後の縮商人「新助」を裏切る。「あい、陸と違つて川中の」と語り出す長台詞は(愛想づかし)の傑作とされる。「これが別れの八幡鐘、突きだされたら新助さん、言へば言ふほどお前の恥、はて三月から拾着る嘘は所の習ひぢやわいなあ。」(「忍ぶの惣太・縮屋新助」河竹繁俊校訂 昭和3・8 岩波文庫 一七七頁)

14 マルセル・モース『贈与論』(一九二二〜二四年、森山工訳 平成26・7 岩波文庫 三八六頁)

15 斎藤理生(西鶴)の系譜——「人には棒振虫同然に思はれ」をいかに語るか——(斎藤理生・松本和也編『新世紀太宰治』平成21・6 双文社出版 一四二頁)

16 木村小夜「吉野山」と「遊興戒」(『太宰治の虚構』第十三章 平成27・2 和泉書院 二五四〜二五五頁 初出原題「太宰治という磁場——「吉野山」を視座として——」山内祥史・笠井秋生・木村一信・浅野洋編『二十世紀旗手・太宰治——その恍惚と不安と——』平成17・3 和泉書院)

17 前田秀美は「遊興戒」「猿塚」論(『太宰治研究』11 平成15・6)で、利左の発言について「現実を嘆いているのではなく、むしろリアリストの目でもって、現実を三粹人に示しているとも考えられる」とし、「世の中や人情の機微を知った現実社会での(粹人)であろうと」する利左の「道化」だとする。

18 注8に同じ。

19 ジュディス・バトラ「権力の心的な生」(一九九七年 佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、平成24・6 三九頁)

20 スピノーザ『哲学体系(原名倫理学)』(小尾範治訳 昭和2・12 岩波文庫 一七八頁)

21 注5に同じ。

22 注15に同じ。

23 白倉一由『西鶴文芸の研究』第三部 第六章「西鶴置土産」の世界(平成6・2 明治書院 七四七頁)

24 観阿弥作の「鉢木」で、シテの「佐野源左衛門常世」は「一族どもに横領せられ」零落の身であったが、ある大雪の日、ワキの「諸国一見の修行者」、実は最明寺入道・北条時頼に一夜の宿を貸し、梅・桜・松の「秘蔵せし鉢の木」を薪として暖を取らせる。後日、鎌倉に馳せ参じた常世に時頼は木の名にちなんだ三箇所の所領地を安堵する。(野上豊一郎編『謡曲選集』昭和10・5 岩波文庫 三三五〜三五四頁)

25 佐藤義雄は「わたくしのさいかく」——太宰治「吉野山」——(『昭和文学の位相 1930—45』第五章 平成26・9 雄山閣 三八六頁 初出原題「わたくしのさいかく」——太宰治「吉野山」覚書——)(『京都教育大学紀要 A 人文・社会』57 昭和55・9)で、「遊興戒」は「夢も無残に打ち砕かれ「世の中の厳肅な労苦」に呻吟する夫婦像」に「焦点」を合わせているとする。「世の中の厳肅な労苦」は『新釈諸国断』の「猿塚」の一節である。

26 観阿弥原作、世阿弥改作の「卒都婆小町」(流派により読み方に異なる)で年老いた小野小町は「頭には、霜蓬を戴き、嬋娟たりし両鬢も、膚にかしけて墨乱れ宛転たりし双蛾も遠山の色を失ふ。百年に、一年足らぬつくも髪」と形容される。(野上豊一郎編『謡曲選集』昭和10・5 岩波文庫 一八一〜一九〇頁)

27 注15に同じ。

28 廣末保「新釈諸国断」(『国文学 解釈と鑑賞』288 昭和35・3)

29 竹野静雄は『近代文学と西鶴』VII 昭和文学と西鶴(昭和55・5 新典社 三七頁)で、「西鶴の人物に自己投入すること」によって「太宰化された人物の最たる特徴は何かといえ、大仰な喜怒哀楽、わけても泣き笑いの表出である」とする。

30 安藤宏「翻案とパロディ」と——「新釈諸国断」論(『太宰治論』第四部 第四章 令和3・12 東京大学出版会 八六三頁 初出原題『新釈諸国断』論——山梨県立文学館「資料と研究」11 平成18・3)

31 『戦陣訓』の本文は、『解説戦陣訓』(東京日日新聞社・大阪毎日新聞社 昭和16・3 「本訓 其の二 第八名を惜しむ」一〇八頁)による。

32 久保田万太郎「草の丈」(昭和27・11 創元社 恩田侑布子編『久保田万太郎俳句集』 令和3・9 岩波文庫 六五頁)

33 朝日新聞(昭和19・12・27 二二一一七号)一面「億兆一心 全力を傾倒」

